

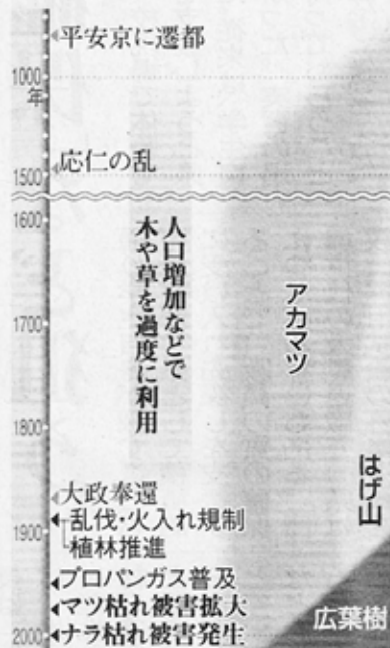
科学

✉kagaku@asahi.com

木曜掲載



森林の保全のあり方や課題について、3人のパネリストが意見を交わした＝京都府宇治市、堀内義晃撮影



京都の山々は時代によって姿を変えてきた。山麓に清水寺などがある東山は、江戸時代の絵ではアカマツらしき林が広がり、比叡山辺りははげ山のように描かれている。

植生の歴史に詳しい京都精華大の小椋純一教授は「燃料や肥料に草木が過剰に使われ、はげ山も珍しくなかった」と話す。花粉の分析からマツは平安京造営

人と自然の共生のために何ができるか。2015「国民参加の森林づくり」シンポジウム(国土緑化推進機構、京都府、京都モデルフォレスト協会、朝日新聞社、森林文化協会主催)が9月27日、京都府宇治市で開かれた。パネル討議では放置や食害の問題に直面する里山を保全するため、地域と産官学がどう連携していくか、意見が交わされた。

討議にはパネリスト3人が参加し、京都学園大の森本幸裕教授がコーディネーターを務めた。

「以前はアカマツが多かった森がシノキばかりになり、伝統的な景観が損ねられている。シカの食害や広葉樹のナラ枯れも広がっ

ていいる」。京都府立大の田中和博副学長は京都市の山々で起きている異変を報告した。京都府は総面積の約74%が森林。市街地に近い山は長く、人々の暮らしの影響を強く受けてきたが、人が遠のいていっていると指摘し、「ボランティア活動で

京都でシンポ

は手に負えない。枯れ木の処理や防鹿柵の設置など、産学民公の連携強化が必要だ」と訴えた。

企業の森林保全活動を支援する、いきもの共生事業推進協議会の原口真理事は、知多半島(愛知県)の工業地帯で企業が連携して取り組む緑地整備の事例などを紹介。「企業が自然環境を保全している土地の税金が減免されれば、インセンティブ(動機付け)となり、活動を大規模に広げやすい」と話した。

樹木の成長ペースに人間社会を合わせよ

作家の池澤夏樹さん基調講演

作家の池澤夏樹さんが基調講演した。要旨は以下の通り。



技術の発達で木材という自然素材は工業製品に近づいてきたが、根本が違う。木は成長が遅く、建築に使えるには何十年もかかる。世の中の動きと合わないという林業関係の悩みを聞いてきたが、見方を変えると、人間社会の方が成長が速過ぎるのではないかと。経済成長に込められた思いは無限。資源は有限で一方で行き詰まれば、別の方へ無限を探している。ところが、樹木は明らかに再生可能だ。手間や時間がかかり、扱いにくい、それらをクリアできれば、こここそ無限という言葉が使えるかもしれない。そのためにはペースをぐっと落とさないといけない。

山が荒れれば海も荒れる。取奪的な林業はもうないと思う。さらに知恵を出し、持続、永続可能な山であって欲しいと思う。

宝が池公園(京都市左京区)で環境教育に取り組む京都市都市緑化協会の野田奏栄さんは、日本の森林は約7割が民有林で、第三者が関与しづらいことから、「公共性の高い森を誰がどう維持し、みんながどう分擔し、そしてそれを誰が決めるのか」が課題だとした。

京都盆地周辺の主だった樹種の割合の変化(イメージ)

時代とともに姿変える

これに先立ち、カナダのケベック木材製品輸出振興会のシルヴァン・ラベ理事の長も講演し、ケベック市で進む木造13階建てビルの設計画などを紹介した。

京都の山々は時代によって姿を変えてきた。山麓に清水寺などがある東山は、江戸時代の絵ではアカマツらしき林が広がり、比叡山辺りははげ山のように描かれている。

植生の歴史に詳しい京都精華大の小椋純一教授は「燃料や肥料に草木が過剰に使われ、はげ山も珍しくなかった」と話す。花粉の分析からマツは平安京造営